

フランシス・プーランク（1899-1963）は「フランス 6 人組」の一人として、簡潔で明快、そして日常的な感覚を重視した音楽を追求した。

生涯の終盤に書かれた「クラリネット・ソナタ FP184」（1962 年）と「フルート・ソナタ FP164」（1957 年）は、それぞれの楽器の特性を十二分に引き出した名品。クラリネット・ソナタの第 2 楽章「悲歌（ロマンツァ）」に漂う深い喪失感や、フルート・ソナタが醸すため息のような繊細な叙情性は、聴く者の胸を打たずにはいられない。特に「クラリネット・ソナタ」は「フランス 6 人組」の同志で、親友でもあったアルテュール・オネゲル（1892-1955）に捧げられており、プーランクが死の直前に到達した、清澄かつ孤独な境地が刻まれている。

1926 年に作曲された「ピアノ、オーボエとファゴットのための三重奏曲 FP43」は、古典的な形式を借りつつも、都会的なセンスと溢れんばかりの旋律美が横溢している。特に第 2 楽章の牧歌的な風情は、彼が愛したフランスの田園風景を彷彿とさせる。

「ホルンとピアノのためのエレジー FP168」（1957 年）は、不慮の事故で世を去った英国の天才ホルン奏者デニス・ブレインを悼んで書かれた。ホルンの咆哮と沈黙が交互に現れる独自の構成は、突然の別れに対する衝撃と心痛を吐露しているかのようである。

本プログラムの白眉とも言えるのが、1932 年から 39 年にかけて改訂を重ねて完成された「六重奏曲 FP100」。ピアノと木管アンサンブル（フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン）の特長を最大限に活かし、ジャズ風のリズム、アイロニカルな楽想、そして随所に散りばめられた甘美なメロディが融通無碍に溶け合っ